



©2011 サンキューキネマ団

構想10年以上
兄弟ならではの自然なかけあい
『39 窃盗団』は、ダウン症の青年が主役を演じる、軽妙なテイストのコメディ映画だ。彼の実際の兄が相手役をつとめ、メガホンをとったのも兄弟(長男)の押田興将監督。名匠・今村昌平監督に師事し、これまで障害者支援のNPOを題材にした『チャレンジ』などのドキュメンタリーも演出してきた監督は、現在『夢売るふたり』(12/西川美和監督)他多くを手がけるプロデューサーでもある。だが、今回は自らの企画で構想に10年以上をかけた念願の作品をつくりあげた。その思いをこう語る。

この映画は、孤児となったダウン症と発達障害の兄弟が、「心
神喪失者の行為は、罰しない」という刑法39条を知り、生きていくために泥棒を働いていく物語である。「ありのままの清剛を撮りたかった」という監督は、彼が出る場面では、ほとんどセリフを書かず、「演出をしない演出」を心がけた。「清剛の行動はアドリブです。彼のいい表情が撮れば、構図的なよい画はいらないと割り切り、その部分はドキュメントとして撮影しました」
そういった手法のため、この作品は劇映画であり

ン症の弟の清剛は、僕自身の価値観にとっても影響を与えてきました。価値観の根っこに「居座っている」という感じ。僕らが当たり前と思っていることが清剛には当たり前でないの、いつも「彼にはどう見える、どう感じるんだらう?」と、複眼的に物事を見てしまっわけです。だから、自分の人間観を反映させる監督作では、まず清剛を撮らないと意味がないと考えていました」
「でも、ドキュメンタリーで清剛を撮ると、彼がまさき起こしたおもしろい出来事は過去の思い出話として出てくるしかない。それではつまらないので劇映画として制作したんです」

監督インタビュー

演出をしない演出。
自分の価値観に「居座っている」
ダウン症の弟を撮りたかった

『39 (サンキュー) 窃盗団』押田 興将 監督

劇映画とドキュメンタリーの手法をミックスして、人の愛おしさを描く。
悲壮感ではなく障害者をとらえた先に、見えてくるものとは。

おしだ・こうすけ
1969年、神奈川県生まれ。日本映画学校卒。今村昌平作品『うなぎ』(97)ではメイキングを担当、『カンゾー先生』(98)、『セブテンバー11』(03)では助監督。04年、李相日監督『スクラップ・ヘブン』よりプロデューサーも手がけ、『夢売るふたり』(12/西川美和監督)などを制作。ドキュメンタリー監督でもある。



監督は、09年夏にプロデューサーの仕事を読み、2か月ほど撮影に取り組んだ。長年の仕事仲間や同級生、かわつていた「しんゆり映画祭」ボランティアなどの協力を得て、300万円の制作費で映画を完成させた。

「物語自体はもちろんフィクションです。でも、背景となる障害者を食い物にする犯罪は現実にある。彼ら

ながらドキュメントの要素が随所に入り、そのことで彼の自然でユーモラスな魅力が写し取られている。民家に侵入した清剛は、財布を探して盗るはずが全然見つけられず、どうでもいい置き物に興味を示したり、そこにあつた煎餅をかじったりする。「ニコニコ戻ってくる清剛を「違っでしょ?」と兄が優しくツツコミを入れる光景は、まさに本当の兄弟ならではの、つい笑ってしまうのだ。

「悲壮感をなくして、障害者とらえたかったんです。そうすることで、障害者の本当のありようがより観客に客観的に伝わらると思つたからです」
背景となった障害者を食い物にする犯罪
監督は、09年夏にプロデューサーの仕事を読み、2か月ほど撮影に取り組んだ。長年の仕事仲間や同級生、かわつていた「しんゆり映画祭」ボランティアなどの協力を得て、300万円の制作費で映画を完成させた。

